

日本経済の読み方⑤

生産

鉱工業生産指数は、景気循環との相関性をもっとも高い指標です。



ぶぎん地域経済研究所専務取締役 土田 浩

前回までは、個人消費、設備投資、輸出と、GDPの支出面の主要項目を取り上げました。今回は、生産面のお話をします。

<鉱工業生産指数の特徴>

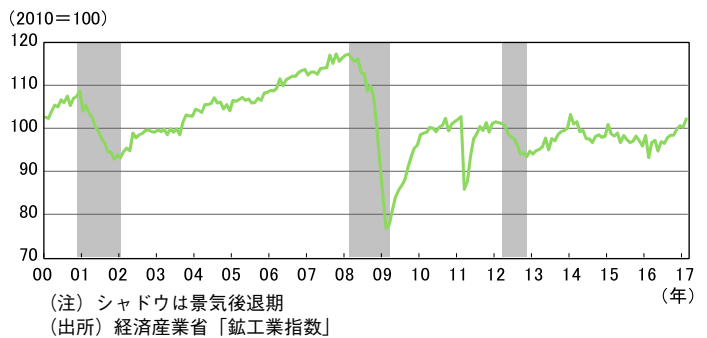
生産面の主要経済指標は、何といたっても経済産業省が毎月作成する「鉱工業指数」です。これにより、製造業の生産・出荷・在庫の動きを、業種別や品目別に詳細に把握することができます。一定規模以上のすべての事業所を調査対象としていますので、統計の信頼性が高いことも特徴です。また、受注データなどをもとに2か月先までの生産予測指数も作成されていますので、直近の実績だけでなく、先行きについての定量的な情報も得られます。

経済のサービス化の流れを反映して、GDPに占める製造業のウエイトは2割程度にまで低下しています。とはいえ、製造業の動きは、依然として景気変動の原動力として非常に重要な役割を担っています。つまり、製造業の生産量が増加すれば、連れて運輸業や事業所向けサービス業などにもプラス効果が波及します。また、建設資材や消費者向け製品の生産が増えているときは、建設業や小売・飲食・個人向けサービス業などの活動も活発化していると考えられます。

<鉱工業生産指数の推移と内訳>

それでは、少し長い目で鉱工業生産指数の推移を振り返ってみましょう(図表1)。縦にシャドウが付されているところが景気後退

図表1 鉱工業生産指数の推移(季節調整値)



期ですが、景気の局面変化と鉱工業生産指数の基調的な動きの変化とが概ね一致していることにお気づきと思います。

2001年にはいわゆるITバブル崩壊の影響から生産は減少しましたが、その後、07年にかけては、息の長い景気回復局面の下で順調に増加基調を辿りました。08後半から09年初にはリーマンショックにより急激かつ大幅な減少に見舞われました。その後は回復に転じていますが、1ドル80円台という為替円高が長く続き、生産拠点の海外シフトが進行したことなどから、日本国内における

図表2 業種別にみた最近の生産指数(季節調整値)

